

「祈りのとき」

作：細谷亮太

語り：田口トモロヲ

私はキリスト教を根本に置いて建てられた聖路加国際病院小児科で40年余り、小児がんを患った子どもたちの「いのち」と向き合い、働いてきた自称仏教徒の医者です。

仕事を始めたころは、小児がんがまだ治らない病気とされていました。不治の病と戦っている子どもたちにできるだけ良い時間をあげることが当時の医療における一番の目的でした。そして、親御さんと一緒に、先に逝く子どもを看取り、悲しみ、悩むのが自分の仕事なのだと思っていました。

小児がん向き合い歳月を重ねるうちに、小児がんの子どもたちの八割ほどが治る時代となりました。うれしいことです。とはいえ、まだ二割ぐらいの子どもは亡くなってしまう現実があります。私が傍にいてさしあげるべきなのは、治らない子どもたちとそのご家族なのだ改めて思い定め、小児科医として患者さんやご家族の方たちと心を通わせながら、人の幸福について、仲間と一緒に考え生きてまいりました。

自称仏教徒である私のためにでも、聖路加のチャペルでは、代々の司祭が心をこめて祈って下さいましたし、励ましても下さいました。今日まで歩んできた道を振り返るに、亡くなっていった子どもたちとそのご家族が、私に教えてくれたことが三つあります。

一つ目。人生で大切なものは絶対に金銭ではないのだということ。

二つ目。その人が生きる上での拠りどころ、例えば子どもならばお母さんやお父さんの存在、大人ならばその人なりの哲学や思想、それらに加えて大いなる存在を信じ祈ることが絶大な力を持つということ。

そして三つめ。人は生きてきたように死ぬのだということです。

チャペルのある病院で仕事をし、近くには浄土真宗の築地本願寺があったことから、親鸞さんに惹かれ『歎異抄（たんにしょう）』を愛読し、いただいた休暇に「四国歩き遍路」をした折の御縁から誘われ、高野山大学の通信課程で学べた経験は、私にとってとても幸いなことでした。

私が生きてきた75年の間に、日本は物質的には本当に豊かな国になりました。そして人々は幸福の度合いを経済の豊かさで測ることに慣れてしまい、お金があることが幸福につながると信じ、長生きをすることだけが目標となってきました。

人はいつか死ぬと決まっています。裕福さと長生きだけを目標に生きるだけではつまらない。私たちの日常に静かな「祈りのとき」が戻って来ることを切にのぞみます。